

2016年度 学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（短期）

所属・職・氏名：教育学部・教授・峯岸 由治

研究課題：1. フレネ教育における社会認識形成カリキュラムと学習指導に関する調査、特色と課題の研究

2. 日本の「伝統文化」に関する教育内容の調査、特性と課題の研究

留学期間：2016年8月20日～2017年3月3日

留学先：フランス・ナンシー・ロレーヌ大学

1. 研究留学の目的

本留学の目的は、第一に、フレネ教育における社会認識形成カリキュラムと学習指導に関する調査を行い、特色と課題を研究することである。フレネ教育は、セレスタン・フレネ(1896～1966)が1920年代に始めた教育方法である。フレネ教育は、「子どもの生活、興味、自由な表現」から出発し、印刷機や様々な道具、手仕事を導入して芸術的表現、知的学習、個別教育、協同学習、協同的人格の育成を図ろうとするものである。そこで、これまであまり解明されていないフレネ教育における社会認識形成カリキュラムと学習指導に関する調査を行い、特色と課題を研究したいと考えた。

第二に、フランスにおける日本の「伝統文化」に関する教育内容の調査を行い、その特性と課題を解析することである。フランスでは、「ジャパンエキスポ」や柔道に代表されるように、日本の伝統文化やポップカルチャー、武道に対する関心が高い。そこで、フランスにおける日本の「伝統文化」に関する教育内容を調査し、特性と課題を研究したいと考えた。この研究は、所属するグローバル日本文化教育研究センターの研究を促進するものでもある。

2. 研究方法

上記目的を達成するために、以下の研究方法を取った。

(1) フレネ教育における社会認識形成カリキュラムと学習指導に関する調査・研究方法は、以下のとおりである。

①ヴァンス、フレネ小学校の参与観察。

②フレネ教育を実践している他の小学校等の参与観察。これは、以下の小学校、保育学校で行った。

・マルセイユ：ムーラン保育学校

・リール：エレヌ・ブシュ小学校 アンヌ・フランク保育学校

・ブリュッセル：クレール・ヴィーヴーブル小学校・保育学校

(2) フランスにおける日本の「伝統文化」に関する教育内容の調査・研究方法は、以下のとおりである。本研究課題については、フランス国立東洋言語文化学院研究者の示唆に従って、調査範囲をヨーロッパに広げ、「日本文化教育」を対象に実施した。なぜなら、ヨーロッパにおける日本文化教育・日本語教育が、日本の伝統文化にとどまらず広く日本文化を対象として研究がなされているからである。また、東洋、日本を対象とした研究は、ヨーロッパにおいては、ロンドン大学 (SOAS)、ワルシャワ大学東洋研究所が量的にも質的にも群を抜いており、調査の必要があったからである。

①日本人学校における日本文化教育実践の参与観察は、ワルシャワ日本人学校で行った。

②大学・研究機関における日本文化教育・研究の実態調査は、以下の大学で調査を行った。

・ワルシャワ大学東洋研究所日本語学科

・ロンドン大学 (SOAS)

③社会教育施設における日本文化教育・研究の実態調査は、以下の社会教育施設で調査を行った。

- ・ナンシー美術館・ナンシー派美術館（フランス・ナンシー）
- ・ワルシャワ日本語学校
- ・日本美術技術博物館（ポーランド・クラクフ）
- ・ギメ美術館・クレマンソー資料館（フランス・パリ）
- ・大英博物館・ナショナルギャラリー（ロンドン）
- ・ドイツ国立図書館ライプチヒ分館（ドイツ）
- ・ベルギー王立美術館・サンカントネール博物館・オルタ博物館（ベルギー・ブリュッセル）
- ・オランダ国立美術館・ゴッホ美術館（オランダ・アムステルダム）

(3) その他として上記(2)に関連して、日本文化教育の授業開発に向けた教材収集を実施した。

3. 本研究の成果と課題

(1) フレネ教育研究における成果と課題は、以下のとおりである。

【成果】

- ①新学期当初の、以下の教師の指導場面、指導内容、指導技術を観察できたことである。
 - ・人間関係の構築と子どもの興味関心、問題意識等に基づく自発的な学習活動への方向付け。
 - ・カード、図書、インターネット等の学習リソースの整備と活用示唆
 - ・個別学習と協同学習を同時進行的に展開するための学習規律と学習態度の確立
 - ・これらを促進するための学習環境の整備、維持
- ②子どもの社会認識形成に関わる以下の教育活動を観察、取材し、資料を収集できたことである。
 - ・コンフェランス（自由研究発表会）に見られる子どもの問題意識、認識内容、認識方法
 - ・子どもの作文に見られる郷土研究の実際と郷土研究による社会認識内容
 - ・郷土研究の題材選択における教師の指導性
- ③ヴァンスのフレネ学校と、リール、ブリュッセルのフレネ学校とを比較できたことである。

【課題】

- ①子どもの作文を翻訳し、郷土研究と呼ばれる学習活動の内容、方法を解明し、子どもの社会認識内容との関連を検討すること。
- ②社会認識形成に関連する子どもの自由発表を見学・取材するとともに、発表前後の教師の指導について観察、取材すること。

(2) 日本文化教育研究における成果と課題は以下のとおりである。

【成果】

- ①ワルシャワ大学、ロンドン大学における日本文化研究から、日本文化の再把握について示唆を受けたことである。ヨーロッパにおける日本文化研究、教育分野では、世界史的動向、東洋文化間の交流、関連の中で、日本文化を再把握しようとする試みがなされ、研究的枠組みの再検討もなされているとのことであった。また、大英博物館における「春画展」のように、日本文化の掘り起こし、再評価が進行していること、ポップカルチャー研究が量的にも質的にも進んでいることを知ることができた。さらに、日本文化研究をテーマとした学会が組織され、研究が進められている状況が明らかになった。
- ②日本語教育研究においては、文化、生活との関連を視野に入れた教科書開発、オーセンティックな状況設定による教科書開発等が進行している状況が明らかになったことである。こうした中

で、ワルシャワ日本語学校では、文化、生活の関連、シュチュエーションを活用した独自教科書の開発も進められていた。

- ③日本人学校における文化創造的な取り組みを見学できたことである。ワルシャワ日本人学校では、伝統文化教育の一環として和太鼓が取り組まれてきた。日本から派遣される教員が、それぞれの地元の伝統的和太鼓を教授するとともに、VTR等により学習活動が展開されてきた。発表会では、中学生が創作的演奏を披露した。ワルシャワ日本人学校の取り組みは、文化継承的学習活動が多い中で注目すべき取り組みである。
- ④新たな日本文化教育研究のテーマとして、ナンシー、ブリュッセル等で展開されたアールヌーボー芸術と日本文化との関連が明確になったことである。
- ・ナンシーにおけるアールヌーボーの発展には、浮世絵等の日本文化の影響、日本人芸術家の影響があったことが、ナンシー美術館、ナンシー派美術館では説明されていた。
 - ・日本美術技術博物館（クラクフ）では、日本の花鳥画に焦点が当てられ、フランスやベルギーのアールヌーボー、ポーランドにおけるアールヌーボーとの関連が系統的な展示と解説によって説明されていた。
 - ・オルタ美術館（ブリュッセル）でも、動植物がアールヌーボー建築のモチーフとして採用されていることが説明されるとともに、日本的な屏風、タペストリーが展示されていた。
- ⑤各社会教育施設における多様な日本文化教育を取材できたことである。具体的には、以下のとおりである。
- ・学芸員等による、ガイドツアー
 - ・絵画を部分的に観察させる学習シートの設置
 - ・他館と連携した説明と展示
 - ・ワークショップにおける多様な体験活動
- ⑥鯉のぼり関連の調査については、以下のとおりである。
- ・ウィーン万博の鯉のぼり（断片）が保存されているのを確認できたこと。
 - ・国際親善鯉のぼり協会（International Goodwill “Koinobori” Society）」設立のきっかけとなった故シュレーダー氏について、関係者からその人となりや当時の様子について取材できたこと。
 - ・故クレマンソー氏に送られた鯉のぼりの所在、一緒に送られたひな人形を確認できたこと。

【課題】

- ①以下の課題については、引き続き調査が必要である。
- ・日本人学校における伝統文化教育
 - ・ヨーロッパにおける日本文化研究動向
 - ・ベルギー王立図書館に所蔵されている浮世絵の保存と活用状況
 - ・ヨーロッパ各国における鯉のぼりの保存状況
- ②以下の課題については、検討が必要である。
- ・新動向の日本語教科書の教材構成を検討し、構成原理を解明すること。
 - ・大学・学校教育、社会教育施設における日本文化教育の内容、方法を検討すること。

(3) 日本文化教育の授業開発に向けた教材収集における成果と課題は、以下のとおりである。

【成果】

- ①ビルボケーを収集し、けん玉をテーマとした教材を作成できたことである。
- ②モンサンミッシェルの歴史的景観を知ることのできる古地図の写真、鉄道による観光客誘致のポスター写真等を入手できたことである。
- ③日本の陶磁器とヨーロッパの陶磁器の交流の一つとして、ドイツのマイセンはもちろん、オラン

ダのデルフト焼きでも、磁器の開発に向けて伊万里や有田の焼き物が研究されていたことが分かったことである。

【課題】

- ①授業を実施し、開発したけん玉に関する教材を検証することである。
- ②収集した資料を組み込んだ、モンサンミッシェルと宮島との文化遺産を視点とした開発授業案を作成することである。
- ③文献調査、取材等によって引き続き調査を進め、デルフト焼きにおける日本の磁器の影響を解明することである。